

「藤樹紙芝居」の紹介⑦

『そばやのかんばん』

(解説)

この話は、藤樹先生に関する伝説話(口碑伝説)の一つです。

先生は自ら「陰徳」の精神を実践し、村人たちにも夜講釈等で、「人に知られない善行の大切さ」を教えました。

隣村(現高島市鴨)のそばやから店の看板を頼まれた先生は、快く引き受け、忙しい中でしたが、練習をくり返し真心を込めて書き上げました。そばやは見事な字の看板を見て、喜んで持ち帰りました。ところが、その看板がたまたま通りかかった加賀の殿様の目にとまり、請われるままに簡単に譲り、再び先生に看板を頼みに行きました。

すると、先生は物静かに座敷に案内し、押し入れから半びつ(長櫃の半分の大きさの箱)を取りだし、中を見せました。何と櫃の中には、練習した看板の下書きが、びっしりつまっていたのです。それを見たそばやは、看板一枚のためにかけてもらった先生の時間や苦勞、真心の大きさに気づいたので、再び頼みに行かなければ、知らないままであったことでしょう。そばやは、先生の心のこもった看板を簡単に譲ったことに気づき、心から詫言いました。

感性豊かな子どもたちは、どんなことに気づくのでしょうか。

(紙芝居)

① 大通りに新しいそばやが、できました。若いそばやの主人は、いい場所なので、よくはやるだろうと考えて建てました。ところが、思っていたようには、やりません。

主人「人の通りが多いのに、うちの店には、お客さんがなかなか来てくれないな。どうしてだろう。そうだ、知り合いのおじさんに、相談してみよう。あのおじさんなら、相談にのってくれるだろう。」



② そばやの主人は、さっそく、知り合いのおじさんの所へ相談に行きました。

主人「おじさん、いい場所に店を建てたのに、あまりはやらないのです。何かよい工夫はないでしょうか。」

おじさん「一度、あんたの店に行ってみることにしましょう。」
おじさんは、そばやの店に来まし



た。
主人「どうですか。何か気づかれたら、教えてください。」

おじさん「かんばんがなくては、何の店か、わからないから、かんばんをかけなさい。」

主人「なるほど。わかりました。ところで、かんばんを書いてくれる字が上手で、親切な人を教えてもらえませんか。」

おじさん「そうだね。…：それなら小川村の中江藤樹先生という方ですね。親切だし、字もうまいとひょうばんだよ。」

主人「そうですか。ありがとうございます。相談してよかったです。」

③ そばやの主人は喜んで、さっそく藤樹先生の家に、かんばんをたのみに行きました。

主人「先生は、おいそがしい方だと聞きましたが、新しくそばやを始めましたので、よくはやるように、かんばんを書いてもらえないでしょうか。」

先生「そうですか。上手には書けないかもしれませんが、よくはやる店になるよう、手伝いができるの

